
VA & WH

潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

V A & W H

【Nコード】

N 9 5 0 8 M

【作者名】

潤

【あらすじ】

藤下真由美が憧れの先輩に告白する。
しかし振られてしまう。

バレンタインデー

第1話

2月14日。

その日はバレンタインデー。

女の子が好きな男の子にチョコレートとともに
愛を告白する日である。

彼女ー藤下 真由美ーもその一人である。

今、真由美は1年と2年の階段の踊り場で
渡したい人を待っている。

「待たせたかな？」

「あ、いえ、そ、そ、そ、そんなことはありません」

「そっか、で用は何？」

「あの、北川先輩…。」

あ、あ、あ、あ、あ、ああの今日

バレンタインでせ、せ、せ、先輩に渡したくて

で、で、で、手作りチョコなんです」

緊張がちがちである。

「そうだねー。」

今日はバレンタインだね。

ありがとう。

でも、ぼくね時間を無駄にしたくないんだ。

そんな話しかたされるとイラつくんだ。

時間の無駄なんだよ。

ま、チョコだけはもらうよ」

「あ、はい」

北川はチョコを受け取り
去っていった。

ブチ。

この日を境に真由美の中で
北川への淡い恋心は消え去った。

バレンタインの翌日1

第2話

2月15日。

「ちよつと夏穂聞いてよー」

真由美が昨日北川とあったことを
友達ー西田 夏穂ーに話した。

「んーそれさあ

北川先輩さー」。

先輩としてというか人としてどうかと思うなー。
というかあの優しそうな雰囲気は
作り物だったのかー」。

ちよいとうち狙ってたんだけどなー」

この話の一部始終をきいている男子生徒がいた。

夏穂に淡い恋心を抱く少年ー高月 雄介ーだ。

真由美と夏穂の会話が一段落したところ。

テクテク。

雄介が2人のもとにきた。

「その北川っていう先輩は何年何組なん？」

「…ハア？」

今まで話したことがないに等しい

男子からいきなりそんなこと言われて

2人とも驚いた。

「だから昨日の北川って先輩はなにもんなん？」

多分答えないと

全学年に聞きに回りそうな勢いだ。

「え…」。

別にあんたに関係ないでしょ」

真由美が答えた。

「まー確かにオレは今日始めて

藤下さんと西田さんに話しかけたよ。

無関係なのは認めるさ。

でも、

さっきの話ー藤下さんのバレンタインの話ーが

丸聞えやった…」

「ちょ、あんたさー

ウチらの話聞いてた訳？

デリカシーなさすぎじゃない」

雄介はまだいいいたいこと言い切れないうちに

夏穂によって一旦打ち切られた。

「あーそうだな。

聞いてたというよりも

聞こえたのが正しいな。

でも聞いててその北川ってやつは気に食わんのよ。

いくら後輩に対してでも相手は人なんだからさ。

言い方とかが問題ありすぎるし、

オレはそいつに一発言いたいわけよ」

「ハア。

あんたには関係ないでしょ。

私のことなの。

ほつといてよ」

「藤下さんは教えてくれないか…」。

西田さんは知ってる？」

「ま、知っちゃあいるけど」

「教えてくんねえ？」

「真由も言ってるけどさー

これは真由のことで、

あんたは無関係でしょ？

…ん。もしかして。

あんた、高月っていったけ？」

「そうだけど」

「ちよいと廊下で話せる？」

疑問系で聞いているのに

すでに教室から廊下に向って誘導している。

バレンタインの翌日2

第3話

昼休み。

雄介と夏穂が向き合っている。

「んーさっきウチらの話聞いたっていったじゃん」

「うん」

「それってさ、

ウチか真由に気があるってことやる？

ま、うちってことはありへんやろうからー

真由狙いなんでしょ？」

「別に」

「じゃ、なんで聞いてた訳？」

「たまたま耳に入っただけや」

「まーそれは信じてあげましょ。」

北川先輩のクラスしってどうする気なん？」

「さっき言っただけど、

一発、相手の気持ち考えろって言いたい」

「相手の気持ちねえ。」

あんたも考えなよ。

自分の話聞かれてた真由の気持ちを。

でも、なんかあんたは信じれそう。

ウチら同伴で放課後北川先輩のとこいくにしようや」

「それでもいい」

バレンタインの翌日3

第4話

昼休みの終わりにかけ。

「ってことでー。」

真由ー。

放課後北川先輩のそこいくかねー」

「夏穂、勝手に決めないでよ。」

高月くんにも言ったけど

これは私のことなんだから」

「でもさー私に話した以上は他人事には感じれないかねー。」

やるって決めたらあいつやるみたいだしー。

まーウチらも行くわけだから

大丈夫でしょ」

「もう好きにして…」

キンコンカーンコン。

放課後。

2年5組の教室から一人

帰路に着こうとする生徒がいた。

彼こそが北川 晴信である。

それと同じ頃

雄介は真由美・夏穂とともに5組の教室へ

向おうと移動をはじめたところだ。

3人と北川が出会ったのは

階段の踊り場ー真由美が昨日懸命にチョコを渡したところだ。

「あ、北川先輩」

「なんだい？藤下さん。」

「ぼくに用かい？」

「あ、いえ、その、私じゃなくて……」
ボソボソ。

雄介を見て

「この人です、この人がお、お、お話したいそうで」

「ぼくはそういう話し方する子大嫌いなんだけね。
で、キミはぼくになんだい？」

「あんたさあ、

昨日も藤下さんに同じようなこといったろ？

チヨコと告白のときに」

「そうだったかな？

何人かの女の子に言った記憶はあるけど。

ぼくの記憶が正しければ藤下さんからは

何ももらってない気がするけど？」

「そうなんか？ 藤下さん？」

雄介が聞く。

「わ、私は、き、き、北川先輩に

こ、こ、こ、こ、ここで渡しました」

真由美が答える。

「本人がこういつてるんだぜ。

渡されてるはずだぜ？」

「さあね？

昨日ここ通ったときに

誰か女の子にチヨコは渡されたけど。

それに告白してきて振った女の子なんて覚えてないしね」

「オレの思うこと、

言ってもいいか？」

「どうぞ、

あんまり時間無駄にしたくないけど」

「テメエ、人としてどうかと思う。」

相手の振られたときの気持ち考えたことあんのかよ？

藤下さんに限んねえ、テメエの言い方からすると

他の女の子も同じように言っただけだよ、

その子らがただ緊張して、

ただ恥ずかしい思いを耐えていつてくれるのに、

＜その話し方嫌い＞だけで振るなんてヒデエぞ。

そりゃあ、好きな人を面と向えば、

緊張して口ごもったりもするわ。

他に言葉はねえのかよ？」

フツと鼻で笑ってから北川は答えた。

「ないね。優しく言えば後々引きずるだろうし、

そんなことされちゃばくは迷惑なんだよ。

用はそれだけかい？」

「ああ、それだけだ。

テメエは人間性に問題があるな」

「無駄な時間を過ごしたな、

そっぴゃ、キミの名は？」

「オレ？オレはなあ。

高月、高月 雄介だ。

1年6組20番だ」

「そっぴゃ、覚えておこっ」

そっぴゃい去り北川は去っていった。

バレンタインの翌日4

第5話

雄介が北川に文句をつけた後。
ブルル。

ある不良グループのもとに電話がかかってきた。
かけてきたのは北川だった。

「おう、なんじゃ？」

「お金渡すので頼みたいことがあるのですが？」

「なにすりゃええんじゃ？」

「そちらの部下を数名貸してほしいんです」

「ほう、そいつらは何を？」

「…」

「なるほど。」

「1人1万でどうだ？」

「ええ、ありがとうございます」

雄介が北川に文句をつけた後。
スタスタ。

そのままの流れで雄介らは
帰路を一緒にした。

「しかしまーあれだねー。」

「ゆーははつきり物言うねえー」

「なあ、西田さん。」

「そのゆーってのはオレのことか？」

「当たり前じゃん。」

「他に誰がゆーいるの？」

「英語であなたの意味の you とかな？

藤下さん、どう思う？」

真由美はいきなり話を振られて困惑した。

「どうっていわれても。」

夏穂のこういうのはいつもだし」

「そうか」

「ってことだ。高月君

これからはウチはきみのことゆーって呼ぶよー」

「ご自由にどうぞ」

2月17日

2月17日土曜日。

ファーストフード店に真由美と夏穂がいた。
ジュゾゾー。

夏穂が飲んでいたジュースを空にして
口を開いた。

「なあ、真由。

ウチやばいわ」

「どしたん？いきなり？」

「いや、ゆーのことが気になるねん」

「夏穂…嘘でしょ？」

「うん、嘘ー大嘘ー」

「変な嘘つかないでよー」

「なーんてね、ホントだよ？」

「ウチは嘘ついてないよ」

「そっか」

「だつてさー」

普通好きでもない女の子の話聞いて

それで気に食わないからって

通相手に文句つけないよなー」

「普通はね」

「やつぱりーって昔からそうだったのかなー？」

「さあ？どうだろね？」

ガララ。

新しい客がきた。

その客は2人を見るなり注文せずによつてきた。
その人物は北川だった。

「やあ、藤下さんとその友達」

「ど、どうも」

「藤下さん、」

20日にちょっと来てほしいところがあるんだけど？」

「え、それはど、ど、どこですか？」

「学校の近くの川原だよ。」

別に何かしようって訳じゃないから」

2人の会話に夏穂が入ってきた。

「あーあのすいません。」

ウチ聞いてて思ったんすけど。

北川先輩が

真由になにかしようと思えないんですけど？」

ニッコリとほえんだ北川はこう言い残して注文にに行った

「ぼくは別に何かしようというわけではないんだけどね。」

ま、いいや。

20日放課後学校近くの川原でね」

北川はどうもイラついてるようだ。

2月19日・20日ゝ約束の日ゝ

2月19日。

休み時間。

「ちよつとーゆー来てー」

雄介が夏穂に呼ばれた。

「なんや？」

「あんな…」

土曜日に言われたことを全て話した。

「偶然かなー？」

オレの下駄箱にこんなんが入ってたんだけどねー」
ピラ。

1通の手紙だった。

そこにはこう記されていた。

「20日放課後5時に

学校近くの川原にて待つB Y北川 晴信」

「なんか怪しいなー」

雄介と夏穂は口をそろえた。

2月20日ゝ約束の日ゝ

2月20日。

真由美と雄介が北川に呼び出された日だ。

真由美はすでに川原で待っていて、

夏穂は上からいざという時のために備えていた。

その次にきたのは雄介だった。

「しかしまー藤下さんも真面目だねー。

呼び出されてわざわざ来るたあ」

「それはお互い様でしょ」

「ハハ。まあね。」

あれだな。

北川のやつ。

人を呼び出しといてご本人がいないとはなっちゃいねえな」

真由美に雄介が近づこうとしたその時。

「おっと、これ以上前に進まないでもらえるかな？」

藤下さんに高月君。

前科はぼくにつくといけないのでね」

いつのまにか北川は右手をナイフに持ち

真由美の首筋に当てていた。

「助けて……」

「ダメエ」

ガサ。

後ろから夏穂がナイフを飛ばそうと試みた。

その物音に気付いて、夏穂を見て言う。

「あーこの前の子かい？」

不意打ちとは卑怯だよ」

真由美にナイフを立てたまま

夏穂の腹に蹴りを入れた。

2月20日『約束の日』2

夏穂が助けに入ろうとしたとき。

「あーこの前の子かい？」

不意打ちとは卑怯だよ」

真由美にナイフを立てたまま

夏穂の腹に蹴りを入れた。

「藤下さんー

西田さんー」

そついい走ろうとした雄介を足を引つ掛けこかした。

「動かないでって言ったのに」

バカドカスカ。

つてえ、くつう。

真由美は雄介がぼこられるのを見てるだけだった。

「ハッハッハッハッハ」

高月くん、君は覚えてるか？

キミはボクに向って汚い言葉を使つたんだ。

キミには敬意というものを持つてもらうよ。

アッハッハッハッハハ」

雄介がぼこられ始めて数十分後。

「これでいいんっすよね？北川さん」

「ええ、これで彼には年上には敬意というものを

キチンともたせれたはずですから」

北川は雄介をぼこっていた人々に

1人1枚づつ渡していた。

多分お金だろう。

「う…」

バタ。

そこで雄介は倒れた。

それと同時に真由美は解放された。

すぐに夏穂の元に駆け寄った。

「大丈夫？」

「うん、まあ。」

「ウチよりゆーのが問題やで」

「ちよっと思ってくる」

2月20日『約束の日』3

真由美は雄介のもとへ向った。

「高月君、大丈夫？」

「…」

「ねえ高月君」

「…」

「生きてるよね？」

横たわり何もいわないが

心肺はきちんと動いてる

雄介の上で手を置いて泣いた。
ポン。

真由美の肩に触れた。

「どうしょ？」

「とりあえず、一番近いのは…」

真由美の家に連れていこ」

なんとか2人がかりで真由美の家まで運んだ。

道端での通行人の視線は気にしてられなかった。

真由美の家。

「ッフー。」

「どうしようかね？ ゆーを」

「私のせいだ。」

私が北川先輩に言われたとおりに

何も考えないでもしかしたらとか

甘いこと考えながらいったら、

高月君がこうなったんだ」

「…多分だけどき、

もしさーウチがゆーの立場だったら

由美のせいだとはいわないよ」

「でも…」

…んああ。

「イッテエー。」

「つーかここどこー？」

派手に意識戻したなーゆー

よかった

と雄介が意識戻したのを確認して2人はそういう反応をした。

2月20日『約束の日』4

雄介が意識を戻した後。

…んああ。

「イッテエー。」

「つかここどこー？」

「派手に意識戻したなーゆー」

「よかった」

「で、いてて、ほんまここどこ？」

「真由のベットやで」

「えー」

飛び落ちた。

いてー。

「あー別に気にしなくていいよ」

そういわれるとまたベットに戻った。

「ありがと、じゃ、お言葉に甘えて…」

ハイ？藤下さんの家？ここ？

どういうこと？」

「まー、いろいろとあつたんよ」

「ちよい1人にしてくんないかな？

考えたいんだ…」

「ここ私の部屋だからあんまりいじらないでよ」

遠まわしながらも真由美はOKと言った。

カチャ。

ボタン。

真由美と夏穂が部屋を出ていつてから。

くそう、オレのせいや。

北川にケンカふっかけただけで。

まさかここまでなるとはね。

くそう、オレがきちんとしてたら。

あの時西田さんが蹴られることもなかったのに。

あの時藤下さんが怖い思いすることもないのに。

あの時、あの時、あの時、あの時、あの時。

くそう、もう後悔はしねえって決めたのにな。

zzzz...

2月20日『約束の日』5

真由美の部屋で雄介が一人考えた数十分後。
ガチャ。

部屋の扉が開いた。

「あー高月君ー。」

もういい？」

Zzzzzz。

「寝ちゃってるや」

テクテク。

真由美が雄介に徐々に近づいていく。
チュ。

寝ている雄介に真由美がキスをした。

ボタン。

「どうだった？」

夏穂は何も見えてないように聞いた。

実際は夏穂はキスの現場を見たのだ。

さっきのキスは嘘であってほしいと願った。

が、それは覆ることのない事実なのだ。

「今は寝てるや」

「そっか、んじゃま、ウチは帰るよ。」

ゆーよろしく伝えといて」

急いで家に帰る夏穂。

2月20日『約束の日』6

夏穂が去った後。

「もういいかな？高月君」

今度は扉越しに聞いた。

「ああ」

ガチャ。

真由美が戻ってきた。

「ごめんね、私のせいだよね？」

ほんと、ごめん」

「別に藤下さんのせいじゃないし。

オレがああ北川ってやつにケンカふっかけて

それにあいつがのっけてきて、

藤下さんはそれに巻き込まれただけや」

「そっか。

ありがと」

「別に感謝されるようなことない。

むしろこっちが謝らないけんくらいや」

「私の為にここまで体張ってくれてたんだもん、

惚れちゃうかしんないよ？」

「そっか、もう少しだけここにいてもいいかな？」

「うん」

夏穂の家にて。

ちょいまってな。

どういうこと？

あの真由とゆーのキスは。

しかも北川先輩があんなことする人だなんて。

3月2日

3月2日。

雄介は近所のスーパーに来ていた。
ホワイトデーの練習の買出しである。

「あー。あとはコーンスターチだけやなー。
どこやー？」

わかんねー。

店員に聞くか」

キョロキョロ。

高校生のバイトのような人がいた。

「あーすいません」

「あ、はい」

「コーンスターチってー西田さん!？」

「はい？」

なんと声をかけた店員は夏穂だった。

しかしそれに夏穂は気付いていなかった。

「人違いだよな…」

あーコーンスターチってどこにありますか？」

「あーちよつと担当のものに聞いてみます」

数分後。

夏穂が戻ってきた。

「とりあえず取り扱っているんで、

陳列してなければー」

夏穂が声をかけてきた客の顔を見た。

商品の並んだ棚を見て夏穂は言った。

「コーンスターチは目の前にありますよー。

アハハー。

「あーゆー？」

「そっか、ありがと」

店員が友人とわかると少し砕けた言葉で返した。

「しかっしまー」

小麦粉、ベーキングパウダー、卵、バニラエッセンス、

ココアに探してたコーンスターチかぁー。

「うちさーもうちょいでバイト終わんのよー。」

「ちょいと待っててくんない？」

「ま、どうせ暇だからいいけど」

3月2日2

雄介が買い物を終えた後。

一旦雄介は家に帰った。

夏穂がバイト終わるのを外で雄介は待っていた。

「あー、まだ冬だなー」

そう呟いたと同時に夏穂が現れた。

「お待たせー」

「で、オレを待たせてどうする気？」

まさかとつて食う気じゃないよな？」

「そのまさかだよー」

エツと少し引き気味になった。

「冗談、冗談。」

ま、話しながら行こうよ」

「オレはチャリだぞ。」

2人乗りでもする気か？」

「あーそれがいいねー。」

ウチが楽や」

結局嫌がる雄介を無視して

夏穂は雄介の自転車の後ろに乗った。

「さてと、どこまで送ればよろしいでしょうか？」

お姫様」

「お姫様はやめてよー。」

ウチそんなキャラじゃないよー。」

まーウチの家までかな？」

「オレは知らんぞ。」

西田さんの家の場所」

「だよーねー。」

「駅前まで送ってくれるー？」

「了解」

そういうと雄介は2人のりで

駅へ向った。

駅までは歩いても10分とかからない。

自転車ともなればそんなにかからない。

3月2日3

2人乗りで駅へ向っている最中。

「駅前まで送らせるってことは、
駅前にすんでんの？」

「まさかぁー!。」

駅近だけど、この駅じゃないなー!

そっぴやゆーって彼女とかおんの？」
いきなり恋話に切り替えられ

雄介は顔を赤くした。

それは夏穂も同じだった。

「いないな。」

好きな人ならいるけど」

「そっか」

夏穂は風に飛ばされないように
雄介の腰に手を回していた。

この時間が永遠ならいいのにと
2人は考えていた。

しかし現実

はスーパ―から駅まではすぐだった。
「よつと。」

「ここですろしくて？」

「うん、ありがと」

タッタッタッタ。

夏穂が階段を駆け上がる。
それを見送る雄介。

3月2日4

タツタツタツタ。

夏穂が階段を駆け上がる。

それを見送る雄介。

…。

「西田さんー」

そう叫び好きだと

言おうとも考えた。

それには絶好のチャンスである気がした。
でも…。

「に…」

タツタツタツタツタ。

いきなり夏穂が階段を勢いよく

駆け下りてきた。

「どしたん？」

雄介は聞いた。

答えは言葉ではなく

行動で返された。

チュ。

雄介の頬にキスをしたのだ。

「ありがと」

そう呟き夏穂は去っていった。

残された雄介はただただ

呆然としていた。

3月2日5

雄介が帰宅した頃。

「……」

どうということや？

まだほのかに頬に残る

夏穂の体温を感じながら考えた。

オレはホワイトデーに西田さんに

渡す予定のクッキーの練習の材料を買う為に

スーパーに行った。

それで、コーンスターチの場所がわからないで、

店員に聞いた。

そしたらその店員がなんと西田さんだったと。

それで待つとけ言われたけど

一旦家帰ってもう一回スーパーの外で待ってたら

従業員用のところから西田さんが出てきた。

それでチャリで2人乗りして駅まで向って。

階段をのぼってるのを見送ってたら

いきなり西田さんが降りてきて……。

最後のキスはなんや？

しかもその後、

ありがとって言われたよな。

いったいなんや？

夢でも見てたんか？

そつと頬に触れてみた。

やっぱり微かながら夏穂の暖かさを感じる気がした。

どうということやー。

今日は寝れそうにないな。

雄介に夏穂がキスした後。
タッタッタッタ。

勢いよくそれこそ

世界記録でも出せそうなくらいの速さで

夏穂は駅のホームに向った。

すぐに電車がきた。

ブルルル！。

…時…発…行き！。

まもなく出発いたします。

その電車に乗った。

電車内での夏穂。

ウチなんでゆーにキスなんかしたんやろ？

確かにゆーは好きだけど。

それは友達としてだよね？

人としての恋愛感情での好きじゃないはず…。

なんでだろー？

なんかもうどつちでもいいや。

3月3日

3月3日

学校。

昨日の寝不足で顔色が悪い雄介。

「なあー高月ー。」

お前えらい飛ばしてるなー？」

1時間目と2時間目の休み時間に

雄介とはそれなりに仲のいい直弥が話し掛けてきた。

「ハアー。」

そうかいな」

「しかもなんかしんどそうだしー」

「そうか。」

保健室にでも行つて来いとか？」

「ちやうちやう。」

別にお前がしんどかろうがしんどなかつるか

ドーでもいい。

正直レーでもいいくらいさ」

「なんやねん。」

用ないなら話しかけないでくれ。

オレは今日寝不足やねん」

「それはミーでもいいくらいだ」

「だからなんやねん？」

「お前さー最近藤下さんと仲いいだろ？」

「別に仲いいという訳じゃないけど」

「今度の日曜、遊びに誘つてくれ？」

「ハア？」

「俺な、藤下さんがな、

この前年上の先輩に告白してるの見てて

振られたのを見てしまい。

なんかそれ以来藤下さんのことしか
頭にないねん。

で、ちょうど俺とも藤下さんとも

仲良くやってるお前が俺と藤下さんを誘ってくれたら

一緒に過ごす時間ができる」

「そういうことか。

ああ、わかったよ。

明日誘つとくよ」

3月4日

3月4日。

放課後。

「ゆー、昨日と今日とよく寝たねー」

夏穂が話し掛けてきた。

「あーそだな。」

「一昨日の西田さんのせいでね」

「んー、ウチのせい？」

「そうや、あれはなんやってん」

「あれ？」

「一昨日、駅で…」

思い出してまた赤くなつた。

「…挨拶だと思つていて」

「挨拶って何ー??」

真由美が会話に入ってきた。

「あーそうだ。」

今度の日曜さ。

遊ばん？」

「あーいいよ、私は」

「ウチもバイトあいてるし」

「そっかー、よし。」

後、俺の友達も1人くるけどいいよな？」

「いいよー。」

多いほうが楽しいだろうしー」

3月10日

3月10日。

一番最後にきたのは
あろうことが直弥だった。

「ちょ、ゆー。」

友達ってこいつー？」

「ああ」

「一応クラスは一緒だけどね。
自己紹介すると」

「せんでいい」

夏穂に阻止された。

「西田さんどうかしたの？」

「別に、何もないわよ」

「いや、

なんかあるって感じでてるよ、夏穂」

「別にどうでもいいじゃないの」

「ま、そこまでいうならいいんじゃない？」

雄介のその一言で夏穂の直弥との
なんらかの関係は秘密に終わった。

4人はカラオケに行ったり。

ボーリングしたりした。

そのまま駅まで

で解散することになった。

「じゃ、バイバイ」

「藤下さん、

ちょっと待ってくんないかな？」

直弥が真由美を止めた。

「ん？何？」

「あんさーバレンタインの日あったじゃん」

「…うん」

「あの日に藤下さんが先輩から振られたの俺見ちゃったんだよ」

「…だから何？」

「それでな、俺な、

それ以降な、藤下さんのことしか

考えられへんようになってしもうてん」

「そっか」

「ドーでもよくないけど。

俺な、藤下さんが好きや。

付き合ってほしいんや。

今日もな高月に頼んでセッティングしてもらってん」

「…」

さすがにはじめて話した男に

初日にこんなこといわれたので

真由美は驚いた。

「ごめん、あの、その、

私と川村くんまだそんなに仲良くないから…

恋人として付き合うのはごめん。

でも、これからは友達として

お互いをしてからそういうこと考えよう」

あいまいな返事を返した。

3月14日、ホワイトデー〜1

3月14日。

ホワイトデー。

放課後。

「西田さんー」

雄介が呼び止めた。

「ん。何？ゆー」

タッタッタ。

走って夏穂の方まで行った。

「今日さー」

「あーホワイトデーで」

「真由呼んでほしいわけだー？」

「ちゃ……うん」

返事を聞かずに夏穂は真由美を呼びに行った。

「あーじゃ、」

ウチはおいとまさせてもらっよ」

夏穂が去った後。

「あー勘違いしないで欲しいんだけど」

これ手作りのお菓子。

「わーこれほんとに高月くんが作ったの？」

「うん、それでな」

「うれしいー」

「いや、人の話を聞いてくれ」

「うん、何？」

「これな、ほんととはな、」

西田さんに渡す気やってん」

「え……」

「だけど西田さんが早とちりして

こうなっちゃったんよ。

なんかごめん」

「私は高月くんのもらえただけでもうれしいよ」

「ありがとう」

「じゃあさ、私の話も聞いてもらえる？」

3月14日、ホワイトデー、2

雄介が真由美にお菓子を渡した後。

「じゃあさ、私の話も聞いてもらえる？」

「うん」

「私ね、あの…北川先輩のことあったでしょ？」

「うん、2回ほどね」

「あのときにね、

高月くんがね、

私のことかばってくれてすごくうれしくてね。

家帰ってから授業中も

それ以降高月くんしか見えないの。

好きです。付き合ってもらえませんか？」

真由美の正直な気持ちだった。

「そっかぁ。

ありがとう。

さっきも言っただけどオレ

西田さんが気になってんのよ。

だから藤下さんとは今まで通り友達でいたい」

「そっか。わかったよ」

3月31日・4月7日・4月9日・4月10日

3月31日。

数日後の入学式に向けて

何人かの生徒は運悪く呼び出されていた。

そのなかに雄介・夏穂の姿があった。

「な、ゆー」

「何や？」

「今いうのもへんやけどさ、

ウチな、ゆーのことが好きやねん。

や、別に付き合って欲しいとか

そういうのはないんだけど

ただ知ってて欲しくて。

心決めたらまた言うよ」

「そっか。ありがと。

オレも考えとくよ」

4月7日。

入学式。

在校生として1年を迎える役目が

雄介と真由美に回ってきた。

「はい、

1組・3組の人はこっち」

雄介がいつている。

「4組・7組まではこっちです」

真由美がいつている。

「あー今の召集係も疲れるわー」

「そうだねー」

アハハ！。

正直雄介は真由美とは

初めからずっと友達と考えていた。

真由美も徐々にだが

ただの友達になれそうである。

4月9日

4月9日。

始業式。

「ゆー」

夏穂が強く呼んでいる。

「何というまでもないよな」

「うん。」

告白する勇氣出てきた」

「そっか」

「聞いてね、長くなるけど。」

あーその。

ウチとゆーが初めて話したのは

あの真由と北川先輩のときだったやん。

最初は変なやつって思ってたんだけど。

なんか徐々にそういうちよつと変だなって

思うところに惹かれたしてきて…。

いつからか好きになっていった。

それで駅であんな行動とっちゃったんだ。

正直後悔はない。

今いいたい。

ゆーが好きや。

だから

付き合ってくんないかな？」

「……」

ツバをゴクンと飲んでから答えた。

「あー確かにオレも正直西田さんには
恋愛感情の好きって思ってたんだけど。」

この前藤下さんから告白されて断ってるねん。
だからここで西田さんにOKするのもなんか
藤下さんに悪いし、オレ自身納得できないから、
ごめん、いままで通り友達でいてくれないかな？」
「わかったよ、ありがと」

4月10日

4月10日。

春休みの課題テストだった。

雄介はあんまり集中できなかった。

友達と思っていた真由美から告白され、
それを振って、

恋愛感情で好きって思っていた夏穂に告白されたのに
それをも振って

今平然と過ごしているものかどうか考えていた。

3月31日・4月7日・4月9日・4月10日（後書き）

はいw

潤初連載完結ですw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9508m/>

VA&WH

2010年11月15日21時05分発行